

## 在日の文系中国人留学生から見た大学専門科目の講義

### —PAC 分析を通して見えるもの—

冨 琬新\*, 中島 平\*\*

\* 東北大学大学院教育情報学教育部

\*\* 東北大学大学院教育学研究科

**要旨:** 本研究では、中国人留学生における専門科目の講義イメージを明らかにするため、日本の大学に在籍する留学生3名に対し PAC 分析を実施した。その留学生たちのイメージは主に、「授業の実践方法」、「日本人教員」、「日本人学生」と「授業内容」といった4つの側面に分けられている。また、その分析の結果から、中国人留学生における重要な授業要素は、①わかりやすい説明の仕方②学生間で協力する学び方③活発な授業の雰囲気④教師の学生に対する熱心な態度⑤学生を尊重すること⑥授業理解のための十分な専門知識と日本語能力ということが分かった。また、中国人留学生の専門科目の講義現場への支援の視点として、「専門用語に対する日本語学習の支援」、「専門レポート執筆への支援」、「日本人教師への信頼感の構築」、「日本人学生の授業の参加意欲の促進」、「誤解が生じないように正確なコミュニケーションの構築」、「自律的な学び方の育成への支援」といったことが見出せる。

**キーワード:** 中国人留学生、日本の大学院、専門科目の講義、PAC 分析、留学生支援

### 1. はじめに

平成20年7月に策定された「留学生30万人計画」骨子の中で、「大学等の教育研究の国際競争力を高め、優れた留学生を戦略的に獲得するため、関係省庁・機関等が総合的・有機的に連携して計画を推進する」と述べられている。また、2018年5月1日現在、独立行政法人学生支援機構による日本に滞在する外国人留学生数は267,042人となっており、その中で、高等教育機関に在籍する留学生数は208,901人となっている。このように外国人留学生が増加している状況は、日本の大学・大学院教育における留学生の存在を抜きにしては考えられず、国際化教育のさらなる発展が求められる。また、上原(1989)は「大学教育の国際化というものは、大学が、自国の学生を含め、文化的背景の異なる世界のどの国の学生にも通用する開かれた教育機関になる過程であるという、今日の国際化時代の教育理念が反映されている」と述べた。

現在、日本の大学における国際化教育に関する

研究の多くは、留学生と日本人学生とが協働する授業実践を取り上げている(伊集院, 2019; 大平, 2018; 末繁他, 2016)。それらの研究においては特に、日本語教育の促進と異文化交流・適応への促進に関して成果が得られた。もちろん、国際化教育において言語能力の発達と異文化の交流への促進は重要な役割をはたしている。しかしながら、優れた留学生を獲得するためには、言語能力と異文化交流以外に、留学生における日本の大学の日本語と日本文化以外の授業に着目する必要があると思われる。というのも現状として、日本の大学に在籍する留学生は上記の授業以外に、自分の専門授業も受講しているからである。この専門授業は日本語の学びと異文化の交流を目的としたものではなく、受講する学生に専門知識の伝達または専門分野において学び方・考え方の育成を目的として行うと考えている。さらに、実践報告「留学生は何に困難を感じているか」(2012)には、80%の留学生が学習(勉強・研究)に困難を感じていることが分かった。その困難を克服するため、

留学生が日本の大学の専門授業に適応する状況、あるいは専門授業に対してどのようなイメージを持つかを明らかにする必要があると考える。

ところで、留学生における日本の大学の授業に対するイメージは留学生の日本語能力、授業の実践方法、学生の専門能力、異文化の適応、母国で受けた学習経験に基づく学習観などの要因によって異なると考えられる。したがって、留学生の授業イメージに関して研究する際、出身国の限定、授業を受ける言語能力と専門能力を均一化して研究を行うのが望ましい。現在、中国人は在日留学生の全体数の1位であり、40.2%を占めている（日本学生支援機構、2018）。そこで、中国人留学生は日本の大学の授業現場への影響が無視できないと考えられる。また、中国人学生の学習スタイルに関する研究には、rote learning（丸暗記学習）、silent learning（静かな学び）、passive learning（受動的な学習）といった鮮明な特徴が取り上げられた（Rose Clark&S.N.Gieve, 2006）。そこで本研究では、日本語能力試験1級に合格している（授業を受ける言語能力が備わると認める）が、受講する専門分野の初心者の中国人留学生を対象とし、PAC分析の手法を使用し、日本の大学の専門授業に対するイメージを明らかにする。本研究の目的は、前記のように授業イメージを明らかにした上で、中国人留学生における専門科目の講義に対する重要な要素を取り上げ、また、そのイメージを分類・考察し、専門科目の講義現場における留学生への支援に資する情報を提供する。

## 2. 方法

### 2.1 PAC分析法

本研究で用いる研究手法は、PAC分析実施法（内藤、2002）であり、以下のような手順を踏む。

- 1) 調査者から調査協力者に連想刺激文が提示される。
- 2) 調査協力者が刺激文から思いつく単語や文章を一つにつき一枚のカードに書く。
- 3) 調査協力者がカードを重要な順に並べる。
- 4) 調査協力者がカードをランダムに2枚ずつ選び、調査協力者に二つのイメージの近さを直感的に7段階（非常に近い（1）～非常に遠い（7））で評価してもらう。

- 5) 4) で得られた距離行列に基づきクラスター分析（ウォード法）を行い、デンドログラム（樹形図）を出力する。
- 6) 調査者がデンドログラムに基づいたインタビューを調査協力者に対して行い、各クラスターや各項目についての解釈や背景について説明を受ける。
- 7) 調査協力者にクラスターごとに名前をつけてもらい、各項目のイメージを直感的にプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）で答えてもらう。
- 8) 調査者による全体的な解釈を行う。

### 2.2 調査協力者

調査協力者（以下協力者と略記）は、日本のX大学修士課程に在籍する留学生Aさん、Bさん、Cさんである。3名の協力者は日本語能力試験1級合格者であり、中国で大学を卒業してから日本に留学し、専門科目の講義を受けるための前提となる知識を持たないという点で共通している。筆者のから直接本人に調査の申し入れを行い、趣旨説明と調査方法の説明を行ったうえで協力の承諾を得た。

### 2.3 調査時期・手続き

調査時期は、2018年12月である。手続きとして、はじめに調査協力者に対して以下のような刺激文を提示した。「日本の大学で受けた専門科目の講義に対してどのようなイメージを持っていますか。これまでを振り返ってみたり、今思いつくことを書き出してください。単語でも文章でも構いません。」

デンドログラムを用いたインタビューでは、調査協力者本人の了解を得てICレコーダーに録音し書き起こしを行った。

## 3. 結果と考察

以下に3名のクラスター分析の結果を提示し、本人の語りに基づき考察を行う。

### 3.1 協力者Aさんの解釈と考察

Aさんの分析結果を図1に示す。



図1 Aさんのデンドログラム

### 3.1.1 協力者 A さんによるクラスターの解釈

#### <先生は授業に対する責任感が強い>

クラスター 1は「先生は責任感が強い、学生に個別指導してくれることがある」から、「専門用語がよく出てくる授業に対して予習しないと困る」までの5項目からなっており、Aさんは「先生は授業に対する責任感が強い」と命名した。協力者 A さんはこれらの連想項目を以下ように述べた。

私たちはまったく素人なので、授業のある内容を全般的に把握することが難しいと思う。そのため、授業の中で、先生は例をあげたり、シンプルな絵を描いて内容を説明してくれる。これは私にとって、すごく助かった。こんな教え方は、すごくわかりやすいし、授業内容に対して理解も深まる。授業が終了した後も、学生のテーブルまで行って学生の感想を訪ねたり、もし問題があれば、個別指導してくれたこともある。(なんか例がある?) OO学生は宿題をする途中で解決できない問題が出てきて、先生に聞きにいった。実は、先生はいつも IOS のソフトウェアを使っているから、Windows の使い方がちょっと苦手ですけど、問題の解決方法を見つけるため、何回も試してくれて、すごく感動した。先生の責任感が強いと考える。(項目15がこのクラスターに出る理由は何だと考えますか?) うん、やっぱり、授業の中で知らないキーワードが出てくると困るね。知らない単語が一個だけではなくて、何個か連続で出てきて混乱しちゃって、すごく気になった。それで、その先の授業内容も見逃してしまった。だから

こそ、例とか絵とかを使って説明することが大事だと考えている。

「例を挙げたり、シンプルな絵を描いて内容を説明する」は、授業において教員の授業方法を表している。その授業方法に対し、A さんは「分かりやすい」「助かる」「授業内容の理解が深まる」といった有効性を述べた。また、「感想を訪ねる」「個別指導」は、教員の学生に対する熱心な態度が表明される。その態度は A さんに「先生の責任感が強い」という印象を残し、「感動した」ような感謝の気持ちが芽生える。しかし、授業を受ける前提としての知識を持たないため、A さんは「知らない単語が一個だけではなくて、何個が連続で出てきて混乱しちゃって」「授業内容を見逃す」といった悩みを抱くことがわかる。そのため、専門知識が求められる授業に対する事前予習の必要性が示されている。

#### <先生は優しい>

クラスター 2は「授業において学生と先生のインタラクションが多い」から、「成績は主にレポートで決まる。試験がない」までの5項目からなっており、A さんは「先生は優しい」と命名した。協力者 A さんは連想項目を次のように解釈した。

授業の中で、先生はよくウォームアップしたり、学生にグループディスカッションをさせたり、けっこう面白い授業形式だと思う。これを通じて先生と学生のインタラクションも増える。しかも、授業に対するテンションとモチベーションを維持することもできるし、知識に対する印象も深められる。もちろん、授業中一方的に教える先生もいるので、その授業の中ではよく眠いと感じた。

評価が高いというのは、期末の評価がほとんど AA とか A であり、B が非常に少ない。すべての学生に AA をあげる先生もいる。先生は優しいと思う。AA をもらったら嬉しいけど、学生の能力の区別なしで同じ成績評価を与えることがそんなに好きではない。なぜかというと、簡単に高い評価がもらえるということがわかったら、授業に対して適当にすればいいと考えてしまうからだ。もし先生がもっと厳しいと、自分ももっと真面目に勉強する。

大部分の先生は留学生の面倒を見るため、授

業の中でゆっくり話して、わかりやすい言葉を使う。たまに難しい単語を使っても、もし学生の反応がなかったら、すぐ他の表現に変える。これはすごくありがたいと思う。授業を受ける中で、一番重要な目的は日本語の勉強じゃなくて、知識を学ぶことだと考える。一方で、そんなにわかりやすくはない先生もいる。かつて、〇〇先生はラッコに関する話をしたことがあった。そのころ、私は「ラッコ」の意味も知らなかったし、先生も教えてくれなかったし、しかも「ラッコ」が話のキーワードとして何回も出てきて、すごく混乱しちゃって、結局、その話も聞き取れなかった。

〇〇先生はよく学生に「素晴らしい！」「いいね！」と褒める。褒められたら嬉しいけど、ちょっと恥ずかしい。自分はそんなによくできたと思わないから。でも、褒められたから、もっと頑張る。学習のモチベーションもだいたい上がって、授業中にももっと積極的に参加する。先生との距離感も縮まっている。もし何か問題があった時に、ほとんど学生を褒めていない先生には聞きにくい気がする。

試験なしでレポートで評価することはうちの部局の一つの特徴だと思う。友達からほかの部局は試験があると聞いた。でも、私はレポートが好きではない、レポートの範囲が広すぎて、把握しにくい気がする。書き終わってちょっと時間が経つと、すっかり忘れてしまった。もし試験があれば、授業でもっと集中するし、復習もする。自分は本当に知識を学んだことが実感できる。

「学生にディスカッションさせる」「学生に高い評価をする」「留学生の面倒を見るため、ゆっくり話す、聞き取りやすい言葉を使う」「学生をよく褒める」は、教員の授業方法、学生への態度といった方面から教員の「優しさ」を導き出している。また、その「優しさ」に対し、Aさんは「モチベーションが維持できる」「授業の参加意欲が高まる」「授業内容の印象も深い」といった有効性があると考え。かつ、感情的に、「嬉しい」「先生との距離感を縮める」という考えを示している。ただし、「AAをもらったら嬉しいけど、やはり区別なしで一緒に扱われることがそんな好きでは

ない」「試験なしでレポートで成績を評価することが好きではない」という話から見ると、Aさんは教員の「やさしさ」以外に、知識を着実に学びたいという希望を持つ。よって、学生と教員の良い関係以外に、学習の質を落とさないための工夫が必要とされる。最後に、Aさんは「レポートの範囲が広すぎ、把握しにくい」と述べ、レポートを書くのに困難を抱き、知識の習得を重視する学習観とずれがあることがうかがえる。

#### <留学生から見た授業における日本人の全体像>

クラスター3は「先生はよく学生にグループディスカッションをさせる」から、「先生は授業の終了時間を守る」までの6項目からなっており、Aさんは<留学生から見た授業における日本人の全体像>と命名した。Aさんは次のように語っている。

先生は学生によくグループディスカッションをさせたり、グループタスクをさせる。研究生のとき、一回そのグループタスクに参加したことがあった。ディスカッションしたとき、私は自分のアイデアを提案してみて、すぐに採用された。すごくびっくりした。日本人のクラスメートにはもっとよいアイデアがあるはずだと思ったんだけど、結局にそっちから提案してくれなかった。たぶん彼らは留学生に気を使ってチャンスを譲りたいのかもしれない。でも、やっぱり私は日本人のクラスメートの考えが聞きたかった。彼らは一体自分のアイデアをちゃんと認めたのか、またはそのタスクを適当にすればいいと思ったか。相手の考えがわからなくて悩んでいた。

授業中、〇〇先生は質問を学生に聞いた時、周りの日本人クラスメートが手も挙げなくて静かだった。その質問は難しい質問ではないのに、誰も答える意欲がなさそうだった。結局、日本語が下手な私が手を挙げて答えた。もし、日本人クラスメートがもっと積極的に発言すれば、私はそっちの考えが聞けるだけではなく、日本語または日本文化の勉強もできる。でも、そういうやりとりがなかった、ちょっと惜しいと思う。授業以外でも、もし自分から日本人に聞かないと、相手から声かけられない。たぶんそっちは私たちの文化に特に興味がないから、交流



に値することがないかもしれない。私たちは新しい環境に適応するため、地元の人たちに聞く必要があると思う。また、日本人の授業マナーがすごくいいと思う。授業中、スマホをいじることもしないし、隣の人と喋ることもない。最後は、先生は授業の終了時間をちゃんと守る。たとえたまにちょっと延長しないとならないときも、ちゃんと学生に説明してあげて、学生の退席も許可する。

「グループディスカッションで提案しない」「先生の質問に手もあげなくて静かだった」「声をかけられない」「マナーがいい」「終了時間を守る」が、留学生の視点から、授業における日本人の全体像を描いている。学生と教員の授業マナーは良

いが、学生の参加意欲が低いということがわかる。Aさんは留学生として日本人とのやりとり、日本人への学びを求めているが、積極的なフィードバックをしてくれなかったことに惜しい、悩むという気持ちを表している。

### 3.1.2 Aさんの総合考察

まず全項目の単独でのイメージを見ると、プラスが11、どちらともいえないが1、マイナスが4ということがわかる。全体的にはプラスのイメージが多くなっている。Aさんにとって日本大学院で受けた授業は肯定的なイメージとなっている。

次に、Aさんの連想項目の重要順位の上位を見ると、表1のようになる。

表1 協力者Aの連想項目(重要順位1位から5位)

重要順位	連想項目	項目イメージ
1	授業において先生は例をよくあげる	+
2	授業において学生と先生のインタラクションが多い	+
3	さらにわかりやすくするため、先生は絵を描いて説明する	+
4	先生は優しい、期末に学生に高い評価をあげる	+
5	大部分の先生は、留学生の面倒を見るため、ゆっくり話す、わかりやすい言葉を使う	+

これらの項目から見ると、授業において分かりやすい説明の仕方、聞き取りやすい話し方、学生と教員のコンタクトがAさんにとって重要な要素だということがわかる。また、これらの項目について、いずれもプラスなイメージなので、授業を楽しんでいることがわかる。

また、各クラスターについて考察を行う。クラスター1において、Aさんの解釈はわかりやすい説明の仕方、学生の学習への支援、専門知識の欠如による悩みに展開されている。クラスター2は教員の留学生に対する配慮、教員と学生間のポジティブなコンタクト、学習スタイルのミスマッチといった3つの側面に分けられる。クラスター3において、Aさんは留学生としての視点から日本人学生の全体像を述べた。まとめると、Aさんの授業イメージは教員のコンタクト、日本人学生とのやりとり、授業とのミスマッチからなる。教員とのコンタクトには、以下の3つの要素が見られる。①<例、絵を使う→わかりやすい→学習が

促進できる> ②<個別指導、質問に答える→先生の責任感が強い→感謝する気持ち> ③<先生とのインタラクション、褒める、評価高い→嬉しい→距離感の縮まり>。この3つのつながりには、Aさんは教員の授業方法を認める、教師に高い評価をとることがわかる。日本人学生とのやりとりは主にその2つの要素があると考えられる。①<学び意欲があるが、相手から交流がない、静かだった→やりとりの失敗→惜しい> ②<スマホ使わず、喋らない→マナーがいい→自分が学ぶべき>。この2つの要素に、Aさんは日本人への学び、積極的なインタラクションの求めがあり、成功できなかったことが見られる。学習観のミスマッチには<試験なし、AAが簡単にもらえる→厳しくしてほしい→知識を着実に学びたい>という要素がある。さらに、レポートを書くことに困難が存在することがわかる。

協力者Aの場合、母国で大学を卒業してから日本に留学した。大学の専門は日本語なので、大

学院で受けた授業に関する前提的知識を持たない。そのため、日本人学生に比べると、授業において日本語能力と専門知識の蓄積に不足があると考えられる。全体像として、Aさんは日本の大学院で受けた授業について、教員の授業方法を認め、学生に熱心な態度を高く評価する。一方、日本人学生との交流の失敗、着実に知識を学びと学習観のミスマッチが見られる。

### 3.2 協力者Bさんの事例

Bさんの分析結果を図2に示す。

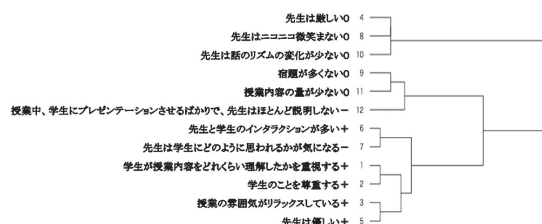


図2 Bさんのデンドログラム

#### 3.2.1 協力者Bさんによるクラスターの解釈

##### <先生の個人スタイル>

クラスター1は「先生は厳しい」「先生はニコニコ微笑まない」「先生は話のリズムの変化が少ない」の3項目でクラスター名は<先生の個人スタイル>とした。Bさんはこの3項目を以下のように解釈した。

先生は威厳があり、厳しく見える。でも、私は怖くて真面目に授業を聞く。授業の中でニコニコ微笑んでいないのは先生の個人的なスタイル。まじめ、責任感が強いと思われるけど、自分にあわない気がする。そのスタイルが好きではない。また、授業が始まってから終了するまで話のリズムの変化がない先生もいる。なんかその先生が授業に対する情熱が少ないと感じた。なので、私はその授業の熱情もだんだん減ってしまった。学生の集中力を失う気がする。

「威厳のある」「ニコニコ微笑まない」「話のリズムの変化が少ない」は、授業においてBさんが持つ教員の個人スタイルに対する印象を示す。そのスタイルに、「怖い」「自分に合わない」「好きではない」といった感情的な批判が見られる。ま

た、Bさんは、厳しく見える先生の授業に「真面目に授業を聞く」と、話しリズムの変化が少ない教員の授業に「熱情もだんだん減ってしまった」「集中力を失う」と述べ、教員のスタイルがBさんの学習意欲に影響を与えると考える。その3つの連想項目にいずれとも「どちらともいえない」とった理由は、教員のスタイルが自分の気分と授業態度に影響を与えるが、教員の個人スタイルを尊重するということである。

##### <学びの内容>

クラスター2は「宿題が多くない」「授業内容の量が少ない」「授業中、学生にプレゼンテーションさせるばかりで、先生はほとんど説明しない」の3項目でクラスター名は<学びの内容>とした。

Bさんはこの3項目に関して次のように述べた。

宿題は少ないから、宿題を通じて復習することが無理だと思う。温故知新、復習しないと、新しい知識が見つかる可能性もなくなっちゃう。ただし、ほかの学生はバイトとか部活とかがあるかもしれない。なので、もし宿題が多いと、ほかの学生にとって余裕がなくなっちゃう。授業内容が少ないというのは、大学の授業に比べると、ここで一年で学べる知識が少ない気がする。けれど、少ないからこそ、深く把握できる。ただし、心理学に関する基礎知識が非常に多いので、自分が学んだことがすごく足りないと考ええる。全学期において学生に発表させて、コメントして終わりの授業がある。先生から教えてくれる内容はほとんどない。そんな教え方がだるくて、間違っていると思う。個人的な考えだけど、授業を受ける目的は先生から知識を学ぶことであるべきだと思う。

「宿題が多くない」「授業内容の量が少ない」は、Bさんが授業で学べることに対して、足りないという考えが表明される。「他の学生はバイトとか部活とかがある」「少ないため、深く把握できる」といった考えで、その連想項目に「どちらとも言えない」とった。ただ、「授業において学生にプレゼンテーションするばかりの教え方がだるい、間違っている」という考えから見ると、Bさんはその授業の実践方法を批判し、自分の学習観との間に衝突が存在することがうかがえる。さらに、この3つ連想項目の解釈から見ると、Bさん

は授業でたくさんの専門知識を身につけるという期待を持つことがわかる。

**<先生の学生に対する扱い>**

クラスター3は「先生と学生のインタラクションが多い」から、「先生は優しい」までの6項目でクラスター名は「先生は学生に対する扱い」とした。Bさんはこの連想項目に関して以下のように語っている。

インタラクションは、授業中に先生が学生にある定義、キーワードの理解を聞いて、学生が答えるということです。このインタラクションを通じて、学生は一方的に学ぶだけではなく、学びながら思考することもできる。「先生は学生にどのように思われるかが気になる」これは私の気のせいかもしれないけれど、(例がある?) かつて、〇〇先生は授業のときに学生がどんな国の出身かが気にならないし、評価に関係ないと言ったことがあった。この話を聞いて、なんか私はかえって先生への距離感を感じた。先生はわざわざそんなことを言う必要がないと思う。しかも、学生にどのように思われるかが気になることは先生の品格としてふさわしくないと思う。好きではない。

学生の理解度を重視するということは、授業で教える内容の量を調整して、学生に授業において学んだことをプレゼンテーションさせることだ。学生が理解したことを他人に説明することによって学生の理解もより深くなると考える。

学生を尊重するのは、たとえ学生の考えがずれていても、先生が学生の実績を指摘するのではなくて学生の視点からその考えを理解してみることだ。

授業の雰囲気を盛り上げるため冗談を言う。優しい顔をしている。

優しいと言うのは、学生が研究をしっかりとしていないとき、宿題をきちんとしていないとき、先生がその学生を責めずに、婉曲的に指摘してアドバイスをあげることだ。

「インタラクション」「理解程度の重視」「雰囲気がリラックス」は、教員の実践方法と教員の授業態度を示す。Bさんはこのことに対し、「思考できる」「理解が深まる」といった有効性を述べた。また、「学生を尊重する」「先生の優しさ」は、学生を指導するときに、学生への感情的な配慮を示す。「学生にどのように思われるかが気になる」先生を認めない態度から見ると、Bさんは先生に教員としての品格も要求している。

**3.2.2 Bさんの総合考察**

まず、全項目の単独のイメージを見ると、プラスが5、どちらともいえないが5、マイナスが2ということがわかる。Bさんは受けた授業に対し、優れたところもあるけれども、自分に合わないところのほうが多いということが見られる。

次に、Bさんの連想項目の重要順位の上位を見ると、表2のようになる。

**表2 協力者Bの連想項目(重要順位1位から4位)**

重要順位	連想項目	項目イメージ
1	学生が授業内容をどれくらい理解したかを重視する	+
2	学生のことを尊重する	+
3	授業の雰囲気がリラックスしている	+
4	先生は厳しい	0

これらの連想項目から見ると、教員の授業態度、学生への態度、授業方法、教員のスタイルがBさんにとって重要な要素だと考えられる。また、その連想項目のイメージから見ると、Bさんはその授業の満足度が高いということがわかる。

また、各クラスターについて考察を行う。Bさんはクラスター1において教員の個人スタイルと実践方法に対する考えを述べた。クラスター2の解釈は、授業で獲得できる知識の評価、教員の授業方法とBさんの学習観の矛盾に展開される。

クラスター3には、教員と学生の CONTACT、学生への態度と配慮、かつ教員としての品格といった3つの側面が含まれる。まとめると、Bさんの授業イメージは主に教員の個人スタイルと授業の雰囲気、学習の量と質、教員の学生との CONTACT からなる。まず、授業の雰囲気については、①<ニコニコ微笑まない、話のリズムの変化が少ない→自分に合わない、好きではない→リラックスした授業雰囲気への求め> ②<授業の雰囲気を盛り上げるため冗談を言う、優しい顔→いいイメージ→リラックスした授業雰囲気の楽しみ>、が見られる。次に、学習内容については、①<宿題と内容が少ない→なるべく大量な知識を学びたい> ②<授業内容に関する質問を出す、学生に思考させる、学生内容をどれくらい理解したかを重視する→認め→着実に学習したい>、が挙げられる。また、教員の品格については、①<厳しく見える→怖い→優しい先生への求め> ②<学生を指導するとき、学生に配慮する→いいイメージ→優しい先生は好ましい> ③<自分が先生の個人スタイルを尊重する、先生は学生のことを尊重する→教師と学生の間で尊重し合うべきという考え>、が取り上げられる。

全体像として、Bさんはより良い学習をする、明るくてリラックスした授業の雰囲気、品格が備わる教員を好ましいと考える。「ニコニコ微笑まない」「厳しく見える」など教員の個人スタイルは、Bさんの授業気分と学習意欲にマイナス影響を与える。一方で、ユーモアを挟む授業を高く評価することから、Bさんは明るい授業の雰囲気を求めることが示唆される。また、Bさんが教員の個人スタイルを尊重する態度と、「学生のことを尊重する」教員を認めることから見ると、Bさんは教員と学生が互いに尊重し合うべきとの考えがうかがえる。学習の面について、多くの知識の獲得、「学生がどれくらい理解したかを重視する」ことを認めること、Bさんは着実に学習できることが望ましいと推察される。学生を指導するとき、学生に十分に配慮する教員を高く評価することから、物腰柔らかい教員を求めていることがわかる。

### 3.3 Cさんの事例

Cさんの分析結果を図3に示す。

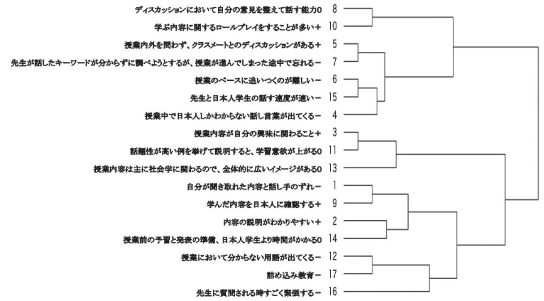


図3 Cさんのデンドログラム

#### 3.3.1 協力者Cさんによるクラスターの解釈

##### <コミュニケーション>

クラスター1は「ディスカッションにおいて自分の意見と考えを整理して話す能力」から、「授業中で日本人しか分からない話し言葉が出てくる」までの7つの項目が存在し、Cさんは<コミュニケーション>と命名した。Cさんはこの連想項目を以下のように解釈した。

私は受けていた授業において演習の授業が多い。その演習授業の中でグループディスカッション、ロールプレイをよくする。そのとき、もし自分のアイデアまたは考えを相手に伝えたいときには、話を論理的にまとめて整えることが必要とされる。また、ロールプレイをするとき、グループの各メンバーが役割に応じて自分の能力を活かして、アイデアの提案とかをまとめて発表することがある。そういうディスカッションもロールプレイも、私にとって、授業のモチベーションが高まるし、日本語の勉強にもすごく役に立つと思う。そのディスカッションは授業外にもすることもある。ただし、日本人学生も、先生も、彼らの話す速度は私にとって結構速いと思う。しかも、私は大学の専門が日本語なので、受けている授業の専門知識を持っていない。なので、彼らの話をすばやく聞き取ることが難しい。その聞き取れなかったことを調べようとするが、授業が進んでしまって途中で忘れてしまった。授業終了後にも確認できない。結局、知識を見逃すことがよくある。それで、授業内容がほとんど社会の話題に関わるので、日本人学生が話し言葉を使うとか、または、日本人しかわからない日本語、省略語を使うこと



がよくある。私はその言葉が全然わからなくて、話もすごく聞き取りにくいと思う。だから、その話にすぐに反応することも無理だった。授業のペースに追い付くのが難しいと感じた。なんか私は授業がまだ始まったばかりなのに、先生がもう後半の部分に入ってしまった気がする。

「授業においてグループディスカッションとロールプレイをよくする」という発言は、Cさんの受けた授業の特徴を示している。その実践を通し、自分の考えを論理的に整える能力が向上できる、学習のモチベーションが高まる、日本語の勉強に役に立つといった有効性を実感している。ただ、非母語話者であるCさんは、一緒に授業を受ける母語話者に比べると、専門知識の蓄積と日本語能力に差があると考えられる。そのため、授業からのインプットにおいて、「相手の話しのスピードが早いので、素早く聞き取ることができない」「意味が分からない言葉が出てくる」「授業内容を見逃してしまう」といった悩みを抱くことが理解できる。その結果として、その授業はCさんに「ペースに追いつくのがむずかしい」という印象を残した。

#### <授業内容>

クラスター2は、「授業内容が自分の興味に関わること」「話題性が高い例を挙げて説明すると、学習意欲が上がる」「授業内容は主に社会学に関わるので、全体的に広いイメージがある」の3項目でクラスター名は<授業内容>とした。Cさんはこの3項目に関して次のように述べた。

このクラスターは授業内容に関する話だと考える。授業内容の特徴の一つは、研究対象は個体的なことではなく、社会レベルの話だと考える。たとえば、少子高齢化、福祉制度のようなマクロレベルの話が多い。だから、私は授業内容に対してマクロ、広いというイメージを持っている。その授業内容については、もしもそもそも関心とか興味とかがある場合、または授業前に予習した場合、授業内容との共感がすぐ引き出せるし、授業に入りやすい気がする。話題性とさっきの共感がよく似ている。ここでは、「共感」とは自分に近いことを言い、「話題性」とは授業内容が自分のことから離れる場合のことを言う。そのとき、先生は内容を説明するとき例

を挙げる。もしその例に中国とか、アメリカとか、そういう国際的な、あるいは話題性が高いキーワードが入っていると、私にとって認識を共有できてわかりやすい。授業のモチベーションも上がる。

Cさんは、授業内容に関して研究対象は個別的なことではなく、社会レベルの話だという考えを述べた。また、Cさんは授業内容に対し、自分の興味を持たせることとして二つの特徴を取り上げる。一つは、自分が授業を受ける前にその内容に対し、関心または興味を持つということである。もう一つは、内容を説明するとき、教員が引用した例が自分の認識と共有できるということである。ここでは、授業内容を説明するとき、全体の学生に共有できる説明の仕方の必要性が示唆される。

#### <ギャップ>

クラスター3は「自分が聞き取れた内容と話し手のずれ」から、「先生に質問されるときすごく緊張する」までの7つの項目が存在し、<ギャップ>と命名した。Cさんはこの連想項目に関して次のように語っている。

「聞き取れた内容と話し手のずれ」、これはけっこう印象深いことだと思う。いつでも、今でも感じられる。自分が理解した内容と先生または日本人学生から伝わってきた内容とが一致しない。たとえば、授業中にある内容をAとして理解したけれども、実はその内容はAではなく、Bの話なわけだ。しかも、これは自分で気がついたのではなくて、試験とか発表とかを通じて気がついた。やはり私の理解がずっと間違っていた。だから、そのズレをすごく心配している。「確認」というのは、授業によく出てくるキーワードを日本人学生に確認する。私は自分の理解があつてかどうかを日本人学生に確認する。私はまったく素人なので、もしキーワードの理解さえも間違っていると、授業内容がまったく把握できない。でも、先生はわざわざ留学生にだけわからない用語を説明することをしないので、他人に確認する必要がある。(その用語、日本人学生はわかる?)わかる。一緒に授業を受ける日本人学生は学部3年生なので、彼らの専門知識は私より詳しい。「わかりやす

い」というのは、例えば、統計学の授業において、公式に対する説明の仕方がわかりやすいということだ。その公式を具体的な例に置いて説明する。私にとってもすごく役に立つと思う。(わかりづらい説明の仕方があるか)ある。たとえば、本に書いた内容をそのまま読み上げる先生もいる。また、私はステップ1がまだわからないのに、ステップ5から説明してくれる先生もいる。そのとき、私は授業内容に対してすごく混乱しちゃう。「時間がかかる」というのは、授業前に予習するとか、後に復習するとか、発表する前、準備時間が母語話者より時間がかかる。私は外国人だから、時間がかかるのも当然だと思う。「詰め込み」は、先生は思考させずに一方的に教え続けて、私は1時間半の授業の中でずっとメモをとるしかない。授業内容に対して思考する余裕もないし、効率が低い教育方法だと思う。個人的にも好きではない。しかも、内容の量が多すぎると、授業においてずっと集中できるわけがないし、内容の見逃しもある。「緊張」というのは、先生から質問が聞かれると緊張する。授業内容がわからないとき、質問されるとすごく緊張した。たとえ質問の答えがわかっても、話を整えて、わかりやすく伝えられるかどうか心配している。もし自分の答えが間違ったらどうしよう。色々なことを心配してストレスが多い。

ここでは、Cさんのその授業との「ギャップ」は主に日本語能力、専門知識、学習スタイルといった3つの側面に展開されている。日本語能力においては、Cさんが日本人とうまく意思疎通できない、授業内容を予習する時間がよりかかる、授業中に分からない用語が出てくる、質問されるとき緊張するという困難を抱えていることがわかる。また、授業を受ける前提としての知識を持たないため、わかりやすい説明の仕方、日本人学生への再確認が必要とされる。さらに、教員側からの一方的な知識伝達の実践方法に対し、Cさんは「思考する余裕がない、効率が低い教育方法、個人的に好きではない、集中できない」という批判を持つ。全体的に、Cさんは自分の日本語能力と専門能力に不安を抱き、授業に対する強いストレスがあるということが明らかとなっている。

### 3.3.2 Cさんの総合考察

まず、全項目の単独でのイメージを見ると、プラスが5、どちらともいえないが4、マイナスが8ということがわかった。Cさんは受けた授業に対し、楽しんでいるところがあるが、苦勞しているところのほうが多い。全体的に満足度が低いということが理解できる。

次に、Cさんの連想項目の重要順位の上位を見ると、表3ようになる。

表3 協力者Cの連想項目(重要順位1位から6位)

重要順位	連想項目	項目イメージ
1	学生が聞き取れた内容と話し手のずれ	-
2	内容の説明がわかりやすい	+
3	授業内容が自分の興味に関わること	+
4	授業中で日本人しかわからない話し言葉が出てくる	-
5	授業内外をと問わず、クラスメートとのディスカッションがある	+
6	授業のペースに追いつくのが難しい	-

これらの連想項目から見ると、Cさんにとって、意思疎通できる、わかりやすい説明の仕方、内容の面白さと学生の間で協力する授業実践方法が重要な要素だと考えられる。また、その連想項目のイメージから見ると、Cさんは授業の実践方法を楽しんでいるが、授業に求められる専門知識の蓄

積と日本語能力にミスマッチがあるので、授業にマイナスなイメージを持つと考えられる。

また、各クラスターについて考察を行う。クラスター1は授業におけるインタラクションの有効性とその悩みについて展開される。クラスター2は授業内容と興味を持たせる実践方法を示す。ク

ラスター 3は専門知識の欠如と日本語能力の不足から C さんが感じる授業とのギャップである。まとめると、C さんの解釈には授業の実践方法、授業内容、自分自身の授業とのミスマッチが含まれている。まず、授業の実践方法については、①<多くのインタラクション→学習のモチベーションが高まる、考えを論理的に整える、日本語能力を向上できる> ②<詰め込み教育→自主的に思考できない、集中しにくい→効率が低い、個人的に好きではない> ③<理解しにくい内容を説明するとき、例をあげながら説明する→わかりやすい>といった要素が含まれる。次に、授業内容については、①<社会や生活に緊密なつながりがある→興味を引き出せる> ②<出身国を問わずに全ての学生の認識に共有できる例→わかりやすい、モチベーションが向上する>が見られる。また、ミスマッチについては、①<意味が分からない言葉が出てくる、話す速度が早い→聞き取りにくい、素早く反応できない→授業内容を見逃す> ②<コミュニケーションにおいてうまく意思疎通できない→自分が聞き取れた内容と話し手のズレ→母語話者へ再度確認する必要性> ③<日本語能力の不足→授業の予習はより時間がかかる>④<専門知識の欠如と日本語能力に対する不安→質

問されるとき緊張する→授業で強いストレスを感じる>が挙げられる。まとめると、C さんは授業内容に興味があり、学生間で協力させる実践方法に高く評価している。しかし、自分自身の専門能力と日本語能力は、授業に求められる専門能力と日本語能力との間にギャップが存在し、C さんに重い心理的な不安とストレスがかかることが理解できる。

#### 4. 総合考察

協力者3名の PAC 分析の結果に基づき、まず、連想刺激文「日本の大学で受けた専門科目の講義にどのようなイメージを持っていますか」に対して中国人留学生における上位の連想項目をまとめて考察する。そして、その協力者たちのイメージに基づき、「授業の実践方法」、「日本人教員」、「日本人学生」と「授業内容」4つの視点から専門科目の講義に対して優れた点とミスマッチとを考察し、専門科目の講義において留学生への支援に資する情報を提供する。

##### 4.1 授業において重要な要素

協力者3名の連想項目の重要順位の上位を表4に示す。

表4 3名の協力者の連想項目(重要順位の上位)

A さん	B さん	C さん
授業において先生は例をよく挙げる	学生が授業内容をどれくらい理解したかを重視する	学生が聞き取れた内容と話し手のずれ
授業において学生と先生のインタラクションが多い	学生のことを尊重する	内容の説明がわかりやすい
さらにわかりやすくするため、先生は絵を描いて説明する	授業の雰囲気のリラックスしている	授業内容が自分の興味に関わること
先生は優しい、期末に学生に高い評価をあげる	先生は厳しい	授業中で日本人しかわからない話し言葉が出てくる
大部分の先生は、留学生の面倒を見るため、ゆっくり話す、わかりやすい言葉を使う		授業内外を問わず、クラスメートとのディスカッションがある
		授業のベースに追いつくのが難しい

表4より、「授業の実践方法」、「教師の学生への態度」、「自分自身の専門能力」および「言語能力」が協力者の授業イメージの中で重要な要素だと考えられる。まず、授業の実践方法について考察を行う。AさんとCさんはわかりやすい説明の仕方に対して内容の理解が深まるといった有効性と実感している。グループディスカッションやロールプレイなどの学生間で協力する実践方法に対し、AさんとCさんは授業へのモチベーションが高まり、専門知識かつ日本語の学習が促進できると考える。AさんとBさんはウォームアップする、ユーモアを挟むという授業の雰囲気を楽しんでいる。次に、教員の学生への態度について考察する。ゆっくり話す、学生を個別指導するといった支援は学生への熱心さとして表明される。Bさんはこの熱心さにより学習モチベーションが向上し、教員に近づきやすいという印象を残し、教員への信頼感を持たせると考える。Bさんは教員が学生の習得状況を重視し、学生のことを尊重するスタンスが重要なことと考える。また、Cさんは、言語能力の不足と専門知識の欠如により苦労する

ことが多いと言及していた。まとめると、①わかりやすい説明の仕方②学生間で協力する学び方③活発な授業の雰囲気④教員の学生に対する熱心な態度⑤学生のことを尊重する⑥授業にマッチできる専門能力と日本語能力の6点が重要な要素だと考えられる。

#### 4.2 専門科目の講義に対する優れた点・ミスマッチ

ここでは、まず、AさんとBさんとCさんの授業イメージを「授業の実践方法」、「日本人教員」、「日本人学生」、「授業内容」の4視点から、優れた点・ミスマッチを取り上げる。そして、優れた点とミスマッチに基づいて留学生への支援に資する情報を見出す。

- ①授業の実践方法に対するイメージについて表5に示す。
- ②日本人教員に対するイメージについて表6に示す。
- ③日本人学生に対するイメージについて表7に示す。
- ④講義内容に対するイメージについて表8に示す。

表5 実践方法に対するイメージ

優れた点	ミスマッチ
例・絵を使って授業内容を説明する	教師が一方的に知識を伝達する
教師がゆっくり話す、わかりやすい言葉を使う	学生にプレゼンテーションさせるばかり、ほとんど説明しない
グループディスカッション・ロールプレイ	
授業でユーモアを挟む	

表6 日本人教師に対するイメージ

優れた点	ミスマッチ
学生に個別指導してあげる	厳しく見える
学生の質問を積極的に回答する	ニコニコ微笑まない
学生とのやりとりが多い	話のリズムの変化が少ない
学生をよく褒める	学生にどのように思われるのが気になる
学生を高く評価する	授業において話し速度が速い
授業の終了時間を守る	
学生の理解度を重視する	
学生のことを尊重する	
学生に優しい態度をとる	



表7 日本人学生に対するイメージ

優れた点	ミスマッチ
スマホを使わず、隣の人と喋らず、真面目に授業を聞く	グループディスカッションにおいてほとんど提案しない
学んだ内容を日本人学生に確認する	授業においてあまり積極的に答えない
	自分から日本人に聞かないと、相手から声がかげられない
	話す速度は速い
	日本人にしかわからない話し言葉を使う

表8 講義内容に対するイメージ

優れた点	ミスマッチ
授業内容が自分の興味に関わる	専門用語・分からない言葉がよく出てくると困る
話題性が高い例を挙げて内容を説明すると、学習意欲が上がる	成績は主にレポートで決まる。試験がない
	宿題が多くない
	授業内容の量が少ない
	先生が話したキーワードが分からず調べようとするが、授業が進んでしまった途中で忘れる
	授業のペースに追いつくのが難しい
	自分が聞き取れた内容と話し手のずれ
	授業の予習に対する日本人学生より時間がかかる
	先生に質問されるときすごく緊張する

全体的に、協力者3名の授業イメージから見ると、授業の実践方法と日本人教員において、優れた点のほうが多いが、日本人学生と授業内容に関しては、ミスマッチしているところが多い。特に、授業内容に関して協力者のミスマッチが多いということが分かった。

まず、授業実践方法について考察する。協力者の解釈を通してそれらの優れた実践方法が学習モチベーションの向上、日本語の学習、専門の学習を促進することが理解できる。また、それらの実践方法には「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」(2005)に提案された実践方法との共通性がいくつか見られる。このことから、7つの原則とその実践方法は母語学生のみではなく、留学生にも応用できると思われる。実践方法のミスマッチについて、Cさんが詰め込み教育を

効率が低いと考え、授業で自主的に思考させるような求めが見られる。7つの原則は学習者中心のスタイルを基本とすることから、多くの中国人留学生にとっても、学習者中心のスタイルは望ましい可能性がある。一方で、Bさんは教員が授業で専門知識を学生に教えるべきだと考えている。Xiao (2006) は、中国の学生は、教師中心のスタイル(授業の準備がよくなされていて、知識に熟達しており、知識内容を首尾一貫した、組織的構造を持ったやり方で提示し、学生によってされる質問に答える能力がある)を好む」と述べた。これは本研究の結果と一部で矛盾するが、それが研究協力者の個性のよるものか、日本の授業での適応過程で生じたものかは分からない。いずれにしても、学習者中心、教師中心に関して、個々の中国人留学生の学習スタイルと個々の教授者による

日本の大学の授業実践にズレが存在すると考える。

次に、日本人教員について考察する。優れた点において、協力者は学生への態度、学生とのやりとり、学生の学習状況を重視するといった方面から教員を高く評価する。特に、Aさんは学生に対して熱心な教員に近づきやすい印象を残し、日本人教員への信頼感も見られる。譚・今野(2012)は中国人留学生における異文化の適応に日本人への対人信頼感も重要な役割だと考えている。その研究の結果も日本人への信頼感は中国人留学生の心理的適応を促進する効果があることを示唆する。そこで、授業の現場でも日本人教員への信頼感は重要なことと考えられる。日本人教員とのミスマッチに関する解釈は協力者が授業において活発で、親しみやすい雰囲気教員への希望が反映される。

続いて、日本人学生について考察を行う。Aさんは日本人学生の授業マナーが良いと考え、Cさんは日本人学生からの支援を求めている。ミスマッチについて、Aさんは日本人学生の授業参加意欲が低い、自分から日本人学生との交流を望んでいるが、日本人学生から積極的なフィードバックがもらえなかった。Aさんのミスマッチは授業現場では教師以外に、留学生が母語学生とのコミュニケーションにも不可欠なことを明らかにしている。それに対し、加賀美(2006)は大学において留学生と日本人学生の接触を促進するためには、学生の自主性に任せるのではなく、教員が何らの「教育的介入」を行っていく必要があると指摘する。Cさんは、日本人学生とのコミュニケーションにおける聞き取りと意思疎通の難しさと実感している。このミスマッチは国際化専門教育における円滑なコミュニケーション、誤解が生じないような正確なコミュニケーションの必要性を反映している。

最後に、授業内容について考察を行う。Cさんの授業内容の優れた点に関する解釈には、教師の実例の引用に全ての学生の認識を共有できることに配慮すべきだということが示唆される。授業内容とのミスマッチについて、Aさん、Cさんは日本語能力試験1級に合格したが、授業で言語による悩みを抱える。このことから、専門科目の講義

が試験レベルを超える言語能力を求めていることが理解できる。そこで、専門科目の講義を受ける留学生に向けた専門日本語の学習支援が必要とされると考えられる。Aさんが試験を通して復習することとBさんが授業で教師からたくさん知識を学ぶことといった希望は、中国人留学生が教師主導型を好む学習観を反映している。Aさんは専門レポートの書くことに困難を持つ。田(2016)は「日本語力が中上級であっても、レポート執筆に必要な語彙、文法、表現、文章構成を把握していない場合が多い。文法や表現を正しく使っているかどうか、議論をどのような展開すべきか等、留学生が抱えている不安は少なくない」と述べた。したがって、留学生が専門レポートの書くに向けて支援する必要があると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、日本の大学に在籍する中国人留学生を対象とし、PAC分析手法を使用して専門科目の講義に対するイメージを明らかにした。その結果、中国人留学生における専門科目の講義に対する重要な要素は、①わかりやすい説明の仕方②学生間で協力する学び方③活発な授業の雰囲気④教員の学生に対する熱心な態度⑤学生を尊重すること⑥授業理解のための十分な専門知識と日本語能力の6点であることが示唆された。また、3名の協力者の専門教育に対する授業イメージは授業実践方法、日本人教員、日本人学生と授業内容の4視点から構成されることがわかった。授業実践方法と日本人教員を高く評価するが、日本人学生と授業内容においてミスマッチしているところがよく見られる。そこで、中国人留学生の専門科目の講義現場で次の点のサポートの視点が見出せる。①留学生に向け専門日本語学習の支援が必要とされる。②専門教育のレポート執筆への支援が不可欠である。③日本人教師への信頼感により学生の学習が促進される。④授業現場で日本人学生の授業の参加意欲は留学生に影響を与える。⑤日本人学生と留学生の交流を促進する以外に、円滑なコミュニケーション、誤解が生じないような正確なコミュニケーションの構築にも注目すべきである。⑥中国人留学生における教師主導型を好む傾向がみられるが、自律的な学び方の育成への支援

が必要と考えている。今回の研究対象は3名であり、客観性の点で限界がある。今後の課題として、今回得られた知見をもとに、アンケートを作成し、より多くの留学生に対して調査を行うことなどが挙げられる。

## 参考文献

- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018) 『JASSO 概要 2018』 [http://www.jasso.go.jp/about/organization/\\_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/jasso\\_gaiyou2018.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/organization/_icsFiles/afieldfile/2018/08/03/jasso_gaiyou2018.pdf) (2019年4月5日閲覧)
- 藤井桂子 (2014) 「留学生は何に困難を感じているか」『ときわの杜論業』第1号, pp.145-171
- 伊集院郁子・岡葉子 (2019) 「多文化間協働プロジェクト」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号, pp.283-298
- 加賀美常美代 (2006) 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか—シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合—」『異文化間教育』第24号, pp.76-91
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]: 個を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 中井俊樹・中島英博 (2005) 「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5巻, pp.283-299
- 大平真紀子 (2018) 「外国人留学生に対するディスカッション活動を取り入れた時事教養の実践」『環太平洋大学紀要』第12巻, pp.269-274
- Rose Clark & S.N. Gieve (2006) On the Discursive Constructions of 'The Chinese learner' Language Culture and Curriculum Volume 19, pp.54-73
- 末繁美和・ケーレブ・プリチャード・ジョン・ルシンスキー (2016) 「留学生および日本人学生のインタラクティブ授業の試み」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』第1号, pp.83-92
- 田佳月 (2016) 「学術レポート執筆不安の尺度の提案—中国語を母語とする留学生を対象として—」『一橋大学国際教育センター紀要』第7号, pp.45-56
- 譚紅艷・今野裕之 (2012) 「中国人留学生における日本人への信頼感と適応の関連」『青年心理学研究』第24巻1号, pp.15-30
- 上原麻子・山崎博敏 (1989) 「日本の大学授業に関する留学生の適応と批判—数量的・記述的考察」『広島大学大学教育研究センター大学論集』第19集, pp.321-343
- Lixin Xiao (2006) Bridging the Gap Between Teaching Styles and Learning Styles: A Cross-Cultural Perspective  
TESL-EJ Volume 10, Number 3

## **How Chinese Humanities Overseas Students See the Universities' Specialized Course in Japan — The Outcome of A PAC Analysis —**

**Wanxin YAN\***, **Taira NAKAJIMA\*\***

\* Graduate School of Educational Informatics / Education Division, Tohoku University

\*\* Graduate School of Education, Tohoku University

### **ABSTRACT**

This paper aims at revealing the impressions of Japanese universities' specialized courses among Chinese overseas students and showing some viewpoints in international education support. It is processed by 3 Chinese students' interview and investigated by PAC analysis. Their impressions can be divided into the practice methods of class, Japanese teachers, Japanese students and class content. Through the analysis of their interviews, clear explanation, collaborative learning with Japanese students, relaxing class atmosphere, teachers' respectful attitude towards student, qualified language skill and adequate professional knowledge are suggested as being important class elements among Chinese overseas students. Moreover, the author discusses some viewpoints for the education support on Chinese overseas students in Japan, such as the professional Japanese language learning support, the professional report writing support, the construction of Japanese teachers' reliability, the improvement of positive participation among Japanese student, and the development of smooth international communication.

**Key words:** Chinese overseas student, Japanese graduate school, specialized courses, PAC analysis, international students support